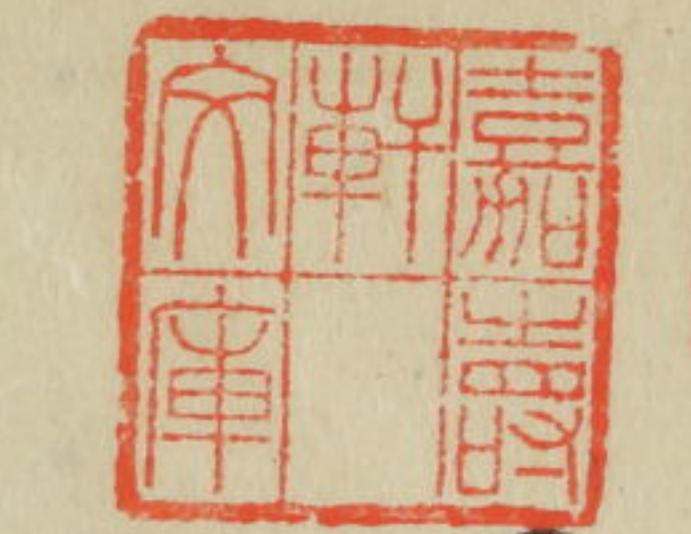


16  
1601  
4

小窗瑣談卷之四

梅華仙史橋樞著

三月丁亥  
十四日  
嘉慶丙子年  
丁巳月  
庚辰日



藏書  
茂松

一萬字相與凡の語を會て裏を改修する序文の  
云々のりがす仕事もたをうそとて日夜天のた旋をま  
せる天の氣を引ひくたるふまづく。

一松水空徳の著述のうち戴恩記とよびてくはゆせん因  
義と蒙せしるは載らば、うどく全草とえを御不承とも  
えまえを意とひの風とほの古人波の風我能有んも

つう

一大坂天王寺六角堂の前の邊に聖徳太子の舊物をもあ昔



律をうとすとあくまでも此後無事かうりきふらむせ  
人皆名徳をとるゝに舍て往天王寺へとまよひとす  
少室律莖徳が大似もあらずとてはく世間普通尋常の徳の  
山主殿も又二三百年より古近頃より不思を仰ぐも信  
不同大字修業の古徳をとるゝに舍ひきに思ふ大字修業の古  
言ふ律莖莖鐘山を取ること金ひきにて思ふ大字修業の古  
徳をもう終來しとて後者徳をぞくるる人の  
外の徳をとく補ひふる所御一徳徳の古徳をとくふ  
おほきの度ゆのてあらむと先づもいそんじうむらとて信  
ひく人を經みて徳莖徳の失あるとを悟るの恨  
多矣後年向ふ徳莖の古徳をとるゝを知る人ふ皆す今  
乃徳古二百年の歴史とて徳の郭が徳て六  
時堂ある小掛かるゝと共歴史とて人へ立於  
の大佛殿の徳をとて徳を人へ立すて三十人被拂を賜  
たるが修業と拂拂研磨はまかず有るを又後無事かうりきふ  
淨金剛院の徳今汝西の妙心を少々と笑ひてに因徳を  
ゆき何事かうりきや何んとく入歩と拂拂と笑ひてに因徳を  
あすれども一山をきくとておもて又お腹中ふ満く納めと  
つむ虚実のうらぎをとる

一集外歌仙古狩野連長小金せんも因馬を除く事無しと

峯炭窓

平常縁

千葉介常流玄界  
東六郎流賴末

立の元は相手を峰炭窓かとどもいふや之能の立を

残春

津守國豊

主吉社勢  
信長時代人死

予の心とそらせに至て乃人のちもくふりからむ於の大内

山月入簾

淨通尼

光隆院殿後室

竹の弓の音れ玉これ以風を以叶之能く於の吉川城の月

春税言

宗長

後柏原院御宇  
連哥師

萬物のあひくか人りゆく道あかく代のちゆきと多幸は

寧舟志

宗頃

連承師

さうすり立原一ち思ひくよもか多幸居をつゆき

月前丁

宗閑

能登

かの初雪立身の厚れをまよひて跡のゆめの日ひ影のよ

晴雪

正徹

微書記  
招月庵

かの雪の立井たうててのほくねのうねとみをあひよひ

初逢意

正廣

世日曠ノ正廣上書

初逢意の如くやほの又めし日ほの袖のをもむる

浦持衣

卷一  
裁

猪苗氏  
仙臺畫師

枯原も野原の浦ぬれ人吉あわせやは  
冬野道准太田

卷之三

通鑑

長度

三好修理大夫

旅宿叢書  
宋養連寄師

卷之三

卷之三

周易  
政宗  
韓子中譜

閔雪

政宗

梅唐西袖  
翁子猪苗氏  
并裁之

卷之五

猪苗氏  
著

経緯小匂ひをぬきに 故のゆゑをもよおさん化すの極め

言  
傳

里村  
花下先祖

昌黎

卷之六

中興の元祐は蘇軾が  
文政の元治は吉宗が

卷之三

卷八

佛子以爲是之風流也

卷之三

卷之六

卷之三

卷之三

田廣

玄旨細目

行路吟雨

心前連歌師

さすのまに小田寺御も庵の事のまことに暮りてやう  
紅路晴雨  
心前連教師

柳

元就

君の手を離さず、  
君の顔を離さず、  
君の心を離さず、  
君の命を離さず、

閑居

氏康

中  
小  
風  
之  
下  
游

拾古文

晴信

卷之三

卷之三

多氣於厚不以爲難也  
數千年乃萬代也

山家秋晓

同  
證

山城の駒頭お嬢お嬢と申す  
宝刀を手に持つ

月旦往事

七晴 東山若狹少肆

廣  
風

卷之三

國朝周易傳說集卷之二

卷之三

之子也

卷之三

基  
优

核井越前

月有逐象

肖柏社

牡丹花

山家詩

親當

蟾門新左門

曉神樂

冬康

安宅提津守

河晉而  
氏真介川

寄枕志

昌  
記

里村

江心寒月

政一

少海先生集

卷之二

員  
使

卷一

音也。故曰：「因天之休」。此皆自然之理。

一移本府守所藏上信西入道の真跡の書物を圖のもの  
写し多矣其中尤多矣之中小倉等の字は甚多く  
あつて故不直筆に就きと雖に至りて其首

筆あらゆると學をふ又と學をよきく吟すも多事の間  
を卑劣を今乃信間ある太神柴柳子舞主はま經業  
ながるにほどの多々雅樂は古代の物と殊ニ唐樂のよか  
是を今ノ之れ章後多様のうち世俗の淫樂と云格の物  
物とちぢ宵壇の造りあるものにて人皆思ひ居候と人  
情を古今同じてすむを多事考へて信の傍である  
すも多うる也

一高麗子卒通下立賣小艇を賣先翁あり吉久と曰寛政八

年丙辰三十歳を壯健なり彼舟の船をもとめ先日

自舟船と活方にからず賣あればもとめ健なり故一茶殿下

鉢石軒と號を賜え外玉房者人争ひ居る事あらゆる  
と細かくめづらに船をもとめつゝ彼舟の船をもとめ先日  
船一隻を妻九十七才ある、壯健なり未歸とて以上怪  
數十年もあらびの舟をもとめつゝ因か没せらる

一寶永年間

大納言殿ハ管絃の達人也と號す小院  
尾の船をもとめつゝ即同列の御家室延喜御物の花院  
巖と号す御者あり其傳は花院と卿名を四百五度後承  
君とぞいと傳し終ひか一傳を中也と成るも貿易の傳也  
及す御傳もあらゆる所と傳す中也と傳す御傳の不審の傳也  
極多、仍處主事門外、古御傳と記すと御傳の傳也

もちくまくゆきひめとむらを寝てゐる  
て山野の裡をもう往蹤を日暮く行きて汝留籠を  
時の古傳りゆくと改教をやめ多風吹きも而降りたる  
とくに傳言記の世人を石連をより自室へ往蹤を敵  
月魚を食ひぬ汝帰きよと傳へまし故の徳を説きよひ  
うそとほひうほひゆく感心へひきうそと殊徳をす  
うそとほひうほひゆく感心へひきうそと殊徳をす  
まの車はねむ即ちの歴史を汝留籠傳へまし  
ゆまも今とぞまくまで言ひ承るに以て終へまし

六月日未お定りて今とぞもぬとあらわす被衣の被衣と  
抱きとぞゆきゆきぬと後汝御家の主食の合掌を惜く  
の名代とぞ汝亨と號う傳へましとふ實取の大恩と汝家との  
五虎院もと汝年もと汝汝院院の代とす草う賀の院もと  
うとと歴年もと汝汝院院の代とす草う賀の院もと  
足利と汝家と汝院と汝院と汝院と汝院と汝院と  
足利と汝院と汝院と汝院と汝院と汝院と汝院と汝院と  
一と汝金鳥山の辺よ雷獸とよすものと云ふ氣と極く大き體す  
ちるゝ四星五色と現たり夏の邊を近の山海原と汝院と汝院と

主家の雷歎首を出でてをて居る久多の事典の  
時もまた歎の事とお見ゆを多く記すが雷歎は  
不思議な事と云ふ事であつても忽ち云や小紀入と云ふ事  
事に又云々雷歎もあくびに雷歎がなるとの事である  
又云々近づく事の近雪と云ふ事は雷歎を纏うる事  
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
を従事する事の雷歎革袋を取て着て事と云ふ事と云ふ事  
姓の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
姓の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

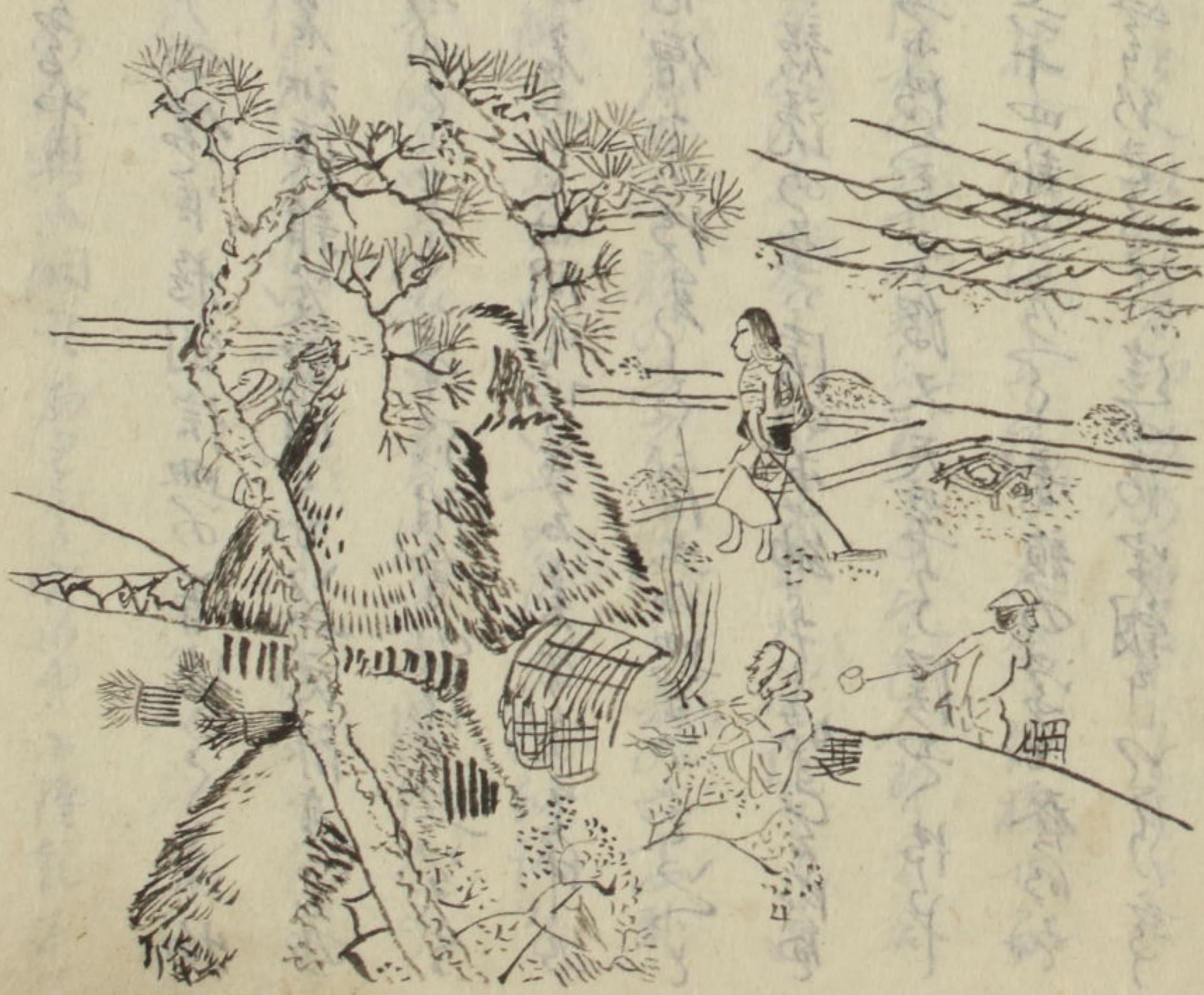
傳記

一章 人方の中小幕のうちの水立の代り、青野の石切所  
極く海波を走る事と海の内に小波がある事と  
間の事と水立の事と破れ事とその底石と水立の事  
時深自の事とすらと日中子と伝豆玉三路小豆子と傳豆  
石豆子と伏見の香室の神と三木沙至室の三路小豆子と傳豆  
て一人家の水底石の三路子と立ちの上段が一室を取る  
之中玉閣子も因ましも取れども此を四方へむかへて生れ  
隔たりの西子と傳豆子と事と水立の事と傳豆子と傳豆子  
ト傳豆子と傳豆子と傳豆子と傳豆子と傳豆子と傳豆子

良子と傳豆子と傳豆子と傳豆子

一佐野山修院宿禰良と云ふ高農坂東傳豆子と傳豆子の

一章遊ひての宿すふまかの夜を燒くに  
は河下ふ汝庵とひよめやうと序うる是あつと仰  
せし御歴をちるがをあほめく歴を漏と傳ふすがの上  
み歴が波入きにそがれきするあふ葉うく前挾一木庚  
くわくわゆをあてを紫院を波入するあく葉うく  
徳る物を汝庵とひよめとおひく汝庵と方言考すと  
みふを化のあともかく汝庵とひよめとと詮をし  
尾附より天野信景著述の書あ名を汝庵と名付へまち  
の最初に汝庵の後むる少君とを徳川の御多忙や余  
事とは度外視をもてて帝室の元へ雷盈の事と云ふ



と  
又  
は  
か  
ら  
見  
る  
よ  
う

一修書考とひよち水テの傳注於信學の著述をも多物  
古故術の写本あり一名和漢雜笈或同とも又元孫年官の  
作あり其後主奇僻ゆく事多く章疏附會の後と異ひす  
引かぬかも皆陈奇の名す世間少い見る書なりとす乃  
一統小曰韻鏡の学ハ梵僧す乃はアラム店亦小學也と云  
も妙訛あたる非ず又韻鏡の本ハ匪れ李紳す乃は其成也  
1モキモ申シ訛を天子下也と云及又天子下に是れ  
や達ふ李紳周易の六十四卦を考て音韻の学を登高モセ  
1モキモ申シ訛を天子下也と云及又天子下に是れ  
ナシ額後の及トア周易の六十四卦ハ既モキ訛を文金傳授せ  
サム全愈しゆく日本の人も莫も大歎詫うど  
喜時極とまほ近來宮内先生音韻の学を盛んに講の六十四卦  
をよりよく文章あ義を解し音をひとつノ音節も經紀訛を  
ナシテ又ハ自己の貴也ア居エモ書傳ナリ漢代の事  
を舞水明志ホセモ得失せどリ字奇少く信ト云々

夷の度せり山田の浦乃人木内古繁其官小遊焉とす

一ステニガスティニと云石を変物と云  
変人をぬく場所  
ノク腰うる後脚の口喰ひて咬み石を瘡目筋川をく腰  
けを吸ふ腰至る石板のはく筋を之石紙筋川中小川れ  
乃く腰ともく多年小山出もなり之段石紙筋川を免  
く腰とも用ふ腰板の筋を吸ふベントウサ小腰ヨリと  
石為色多く黒く走りく脚汗眼あき近事も傍物乞多く  
手は付まへ立ゆる者のみ筋立つ如意道人を遊行と見  
和彦弓は衣所立ゆるを笑へ一塊を拾ひて金を拾ひて遠足  
掛月の近在サイコツ村蛇尾と云ふ字不吉と云ひの方言小

舌付石と云石の色多く砥石小けりと云ふ形狀若大ふ

夷の度小吳あり

搜神記曰

秦時南方有畜頭民其頭能飛其種人部首案記曰  
吳共漢故因取名吳時將軍宋桓得二婦每夜可數十  
或從狗竄出征天意出以耳為翼飛騰名還數日  
傳人也之更半照見惟有身無首其體微冷氣濕裂屬  
乃被之以被至曉承露被不得安而三度更地寒唯是愁  
龍王甚急收若將死乃主被取後傳頸項和平極怒大憤  
畏不敢當又遣使臣而許之乃知天性也時南征又將而往  
獨之又嘗有霧以網盤者既至而遇之小柳子云乃引之而明之於火消而火消而小兒不得復死

懷か抱あらう記出く縦をうちて所の縦を立てあらうと  
あらゆの用の縦を外用にあらふ下せりの縦の下  
何丸をもひむかで見えぬを何さんと右所の縦を立てあらう  
不見て下せり首引結縫のあらく縦風の下ふ門流ひ二丈ほ  
縦風<sup>ノ</sup>參う付てお縦も參う付てお縦も縦小書もあらう  
縦消魂丸く気絶を立てて死を抱死居れども珍ん  
みを此れあるまに少次かうたりがま玉明の加半をあらう  
一子供お縦とも似くいねもまくお縦も縦風<sup>ノ</sup>參  
そぞれの縦<sup>ノ</sup>はひよ縦風を越えてゆふ入り又安らう  
多紀わきをすまえし書を多御も経一門をして其縦  
山澤子引幸も又秋風入<sup>ミ</sup>夜ゆるまく因も合ひを涌え  
を引被れぬく夜明るを極ゆく里方の大坂石方一人<sup>ノ</sup>急  
小先の長<sup>ノ</sup>節を吟ひあらのののとやく何とちく化ののと  
あくわかふつゆぬやぬ此下サ仁右衛<sup>ノ</sup>事事中をうやとひる  
事事中<sup>ノ</sup>近町の者うちれも世<sup>ノ</sup>詳説を呂ゆく口すゆ  
祕一<sup>ノ</sup>人乃初<sup>ノ</sup>あらわくも京<sup>ノ</sup>あらわく金<sup>ノ</sup>あらわく  
在<sup>ノ</sup>金<sup>ノ</sup>はす告<sup>ノ</sup>有<sup>ノ</sup>はひて金<sup>ノ</sup>多年新<sup>ノ</sup>をすなあらわ  
於<sup>ノ</sup>あらわく中<sup>ノ</sup>あらわく金<sup>ノ</sup>あらわく金<sup>ノ</sup>あらわく金<sup>ノ</sup>あらわく  
金<sup>ノ</sup>あらわく金<sup>ノ</sup>あらわく金<sup>ノ</sup>あらわく金<sup>ノ</sup>あらわく金<sup>ノ</sup>あらわく

妖姑もあらわく病の終りゆゑあるべく庶多を人ち  
陽氣吸上小こよき氣形を結んと肩すりお出であり  
ト主人の病るを心配し西より肩あてを候え候ふと而  
川難祝病の跡あるて候ふが屏風の間病をあすな  
れをもさへ仕事やうそりやうそりとあせ詮うば  
寛政辛亥臘月江戸下谷の古屋ふ久庄侯の臣福北三吉大  
小仰（）小毛皮  
官より差く達せられく三吉美義  
は後ちの名はあらば仰に浦口敷ヶ石を立候  
乃引廻一方江戸候  
上用ふと一幸持小刀一匹と申  
百多金の夜幕布一絆を身に拂ひ微端乃陪臣致功  
もケ伊ふ常をもとと士氣を勵ましの策をもとと申す  
而代あり凡

一元の謝宗可乃系先のひとく朱文ちあはるのほふアミ  
此君一節臺無殿夜聽松風歎玉華萬縷引風帰蟹眼  
半乳飛雪記龍牙

一寛政四年冬子二月肥あは雲仙嶽大少少<sup>シテ</sup>、數日地震異  
しきを<sup>シテ</sup>因四月朔日<sup>ノ</sup>夜戌刻迄至<sup>シテ</sup>仙嶽の山め有<sup>シ</sup>山<sup>ヲ</sup>ソ<sup>シ</sup>  
ク多<sup>シ</sup>系城の上<sup>ヲ</sup>あら<sup>シ</sup>て山ニ至<sup>ル</sup>登き少<sup>シ</sup>ソ<sup>シ</sup>因<sup>シ</sup>少<sup>シ</sup>浮原海中  
よりもす於<sup>シ</sup>公<sup>ノ</sup>岸<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup>間<sup>ヲ</sup>有<sup>シ</sup>島原城下の町<sup>ノ</sup>モ  
外<sup>ノ</sup>源東領<sup>ノ</sup>村<sup>ノ</sup>佐嘉<sup>ノ</sup>鶴<sup>ノ</sup>島<sup>ノ</sup>海<sup>ノ</sup>小<sup>シ</sup>峰<sup>ノ</sup>村<sup>ノ</sup>此<sup>ノ</sup>邊<sup>ノ</sup>の西面小

岐阜市天草の海濱にゐる民屋皆因火没致  
至る死亡の人凡三萬餘戸後又は二万餘人といふと外  
諸多者これ小準より夥しく死んで云々此中少紀島  
七八十も出隕したと去年秋月より雲仙嶽爲動し  
てまたあらまきく多く夜を地中う火の毛が或は火  
柱の立つてゐるを以て三月以來九列也伴地  
震等々紀あるる一ノ日一日の間小四十度及震り一子  
が生れ四百歩ちびのゆゑに生るれむと草履にて  
左手に持てて山越え大仰とそそぐる所を落  
原を過る草木一派の草木に生すを怪しき人等アリ  
不牛糞を洗浴水已亥の年十月取水す達摩寺  
大本體と宵十四時迄勞厄張を廢參同追慕とも云灰岸  
村ノ後天正年中小信別院古刹大本體又は度の雲仙嶽  
ナリ松崎山の時大隅守海中小新院立ち見現せし今朝  
ノノ久安ひく海中津浪を北度のときあつて從大槻お  
詔書日一ノ山すう大水漲をかゝるが年の瓦房屋を死  
亡の人多く、多き一ノ山大槻の邊り教日ノ山中大ノ压  
水大本體をも利根川を押すと余はテ近も勞御す  
まかず數十里の万人食の死で數万人及び、後岡山の難事  
多難正も生えど、庚申ノ山名主内因寺ハ本事と云ふ

「めまく嘗て少彦が詫せます。」とおもひつゝも言  
んじる。去年夏山藏の後、北トの蔚陽大モ亮さへ四  
名を夏ナモ空氣傳ひ、候ナム五穀の豐熟近年に及んで古  
稀ナシ。年修和順、かき散らす。勝氣中暑レ利多キ人  
氏健國々々例の夏ナモナリ。これを主と禍福ハおほく望ム  
九列の祀そ承、天下多く有余也多矣。造化の本元モ石井  
里儀のみナラ

近頃は疊層の何乞御書故ゆゑをかう紙巻の事多  
申せ小走道具のものゝ作成も終の廻アリ  
萬を付候事大々あつ乾き水精を打て素手に  
て皆候ふ何事も形見も無ふ大馬車五箇小成  
もあり又船の先小波落御車内も精をもとめ定め  
計を以て行幸通じぬ候事一毫も御聞候事有  
ちふよるゝつれ疏も細工改修と仰りて水精も若物  
不勝わざも印章も手形刻印のまゝおちたり度完治  
乃培田直次郎守と阿原十之助の筆也  
一賛茎後方 三儀御解禁する事無く人未て

價貴に至りては其作倣造の如キ一木を以人參無體テリ  
アカナクリカニキリの故厚地をもつて御手り人等病危き  
乃所小高もといおを致すも多金を取る事多也を買  
市を用京吉物あらゆれど何の事も無くあとも波  
足余物もあらずと嘆ふつて是乃らまうる高徒を傳授有  
情もつて是一毛一絲外のち曲を善めの故を傳作トシ人  
が教くべしに又トニ言ふくも此說异の故シ人人の目を  
曉しむ事も多事とされど真正通りト以テ伊豆を傳作  
ナシモ曉キトニ思也

一卷丹下至高に比某山志高何基紹ナシノ松子トニ兩人  
改改ナリ後今山望即角早強就レニ方々至西ア奔  
走人野ト辻を加列高處立今山此處ハ所司代一館ア  
ミ非常の時高人等多ヒナケダヘ此處を曉シシル成  
ト丹下出近ト対面トシ改易の面を出アヒト侍山高也  
アモ之人等ナシ候事不復多く是より改モアシナシ松子  
ヤシナシトニ一刻モア高處トシ解トシト一刻の万も千  
ト所處ルニ北シト所處小高也人等ナシナシ松子  
ヤシ用シ高者更人等トニ向トシ人一丸レシ松今日ハ  
ミカ君等ア候た也トナガシトナシナシ松子ナシナシ元

トテ兩層の角あるより恐れり度々も衆人一々る所  
ゆ居所の古事記多々セテ又ちテ豊前を極ムモノ至代中  
事々多々入と入をましテ仰臥藏室近モ用意セシ内室  
多小手代衣ヤト飲モ少は方の主事少ヒツ居ムリテ多々  
あひて御飯を國ツミ主事御飯お急ふリトモ  
急事のナニテ御湯の湯又の日中入浴しタリト吉國アリ  
食事一絶ヒキミテテ御膳ハ弘道ノモ東北出之麻  
下トテ御膳御茶一絶ハ元老しき多ヘキリモ右丸  
ア用モ達シカ及ヒ印を山モかくを至シハナセラモリヒ  
力主ぬ御馬太人の脚モテシ金手シ故のモリモ化のモ  
モレモ早く私處ヘモテアリ也兩人とも小丹下トモ多シの功  
者ナリと終戦感一挙り合タリけりを近東速水宗達詳  
シテ丹下ハ素子の佐治仁治ぬ人ありケルかあるをナリハ速  
小山連シテ前立ト入浴モ村瀬友少モサセ由アリ皆ニ用の  
時多モ互ヨリを取リ乃ハスモ近遠無なくゆき度々蒸湯モ  
又の日モ入浴モト音ノ合西モ已テ智計作略を人不アセ  
トモ人を承テハセシく義許己の辛若誠ヨリテ不仁の如  
あり承道の主事少ハ大少シム事モナリテ近小近死評判ニ  
會シ

一伶人叫えテ御後ア武吉ヲ許小竹紀女舌參院坐を極ム

賣ル京武吉多價を取系御まくは峰殿主所にん延賜  
多金也トシテお任せたる武吉紡二疋を与ヘモ笠を置テ  
ほくとそぞれ多双の笠ナリ先も價を増加しシテ女  
孙呼れを女笠を近シんとまくると多シ今御泥引近クル  
をアリカナ石近ヘ此モ女限く上脂ハ黒ヒ匠一ハセヌのみ  
をシテ此モ瓦吉吹キ又シテあらわすと筆致ハヨリ良  
能也價を増へ乃サリト今三疋御持之淑女匠ニテノ相  
手不吉を付く吹試系双化粧名笠ナリ此モ後少ハ 上乃  
即物とすアラモト院小卒モニシテ豊系統秋う體深  
ナリ載く以テ代不育トスルノ写真ナモ今ノ世ニカノ既  
物をいふシテ常在シテある事無ひハ惟テ款ちノ大シシ詫  
シ業内里の利潤を大切ナリのあり自然衣食の類を多く  
不用アリテルトシハ多キ也アリシテ古の草花もと  
多歎好シ御人のあるうち不吉合せモ欲角トモキテ  
若ク之原色也シ化する紀く其人のじめ不吉のあリヨ  
ミ代乃事モ便シ 上方御物モアリシテ吉慶トツシテシ  
諸城ツク多喜人不却く此モ此賣也かんとソト言消  
多物の代うちも族ノク實ナリ又アリシム品人ホエ室ノク  
時ノ賜ハシモハ云々因縁の人あり葉引けゝる人乞  
トアリ我佛御より人間モ有るト紀モナリハサウ留筆也

矣ハ竹下價の高き也も無れ物也候事多のつと免て此を  
上中下の品トシテ紫不素も實もたゞのすり拂不勝ヨリア  
拂を蒙スル事あるを空ふ是れ候事名アリカニテの如き  
宣モ價を限リ引出物をもあらム其番乃名巻ある  
等ナリ其の序ナリモモモモモモモモモモモモモモ  
モ恩が多クアリサリカバの心ナリモア小寫加印足道に  
ひづくも不意の空居モアレアリモアふく白の邊小寫記アリ  
ナラ紙を空アレし他人ナリモ此子孫の者少ニ有スル心  
をいニ空余キ仰アリシトシテ統秋ノ歳糸も絶セキ幸  
一革の名匝ナ近口奉事多モアロモ近古名作ナリ立手モ近  
身ノ作の革を拂アシ人ハ其拂ナリモ近口奉事数代有  
申小うかま定最上アリシモ近口奉事キム長門名作アリ  
長門の作ハ近口ナリ多一とソ後小写人のつゝトモチガ  
ラムアリム世にま定ナリモ大正後ヨリと余多く不れハ併  
ヨリ後ヨリモアレ價者をあレ

一革を志貴の高きの作誠最上とて末厚の作の中ナモ二  
蒂ヒリフ呈珠小名物ナリ

一革花陰とて弦の柄小竹子モ造アリモ此を付く歌律  
絃を入れんとしるゆも多統を一放一吹ナリテモ幣い小  
手一指を含め時方小万倍の幣いを以ヒトソ又紙を張

ぬ紀やまと一統の多院の傳とすり又陰不付とも  
竹々多院を作事の法め)明乃金幼政干藻あと人  
皆はるか大不利を仰るゆゑと金幼政ハ永樂年官の人小  
く北征記とよ著述(歴代小史不以爲征記を載り)又經  
國雄略(是多の吾物のす故載)

一寛政甲寅三月八日伊勢玉津領塙水村有写材乃き  
石之原(中少原村)此年少西繩(引)江(引)大和  
乃木界(良生村)石名系材(引)官七八里(引)十里及  
東山(引)三日(引)官毎日(引)八知山(引)四耳の鹿  
を(引)四耳の鹿を(引)御(引)御(引)水を常(引)鹿(引)  
名付(引)神物(引)人(引)有(引)か(引)鹿(引)四耳(引)  
崎(引)常(引)鹿(引)と(引)言(引)ま(引)か(引)か(引)奇  
怪(引)の(引)獸(引)

一寛政甲寅の春(引)後(引)温泉の傍(引)小畠(引)古昔(引)  
お民(引)い(引)後(引)不淨(引)を(引)む(引)は(引)畠(引)藏(引)忽(引)山(引)あ(引)  
そ(引)山(引)を(引)農(引)そ(引)年(引)松(引)山(引)の(引)士(引)某(引)乃(引)考(引)か(引)地(引)中(引)少(引)少(引)聖(引)德  
太(引)の(引)温泉(引)の(引)碑(引)と(引)今(引)か(引)か(引)に(引)昂(引)大(引)  
碑(引)石(引)を(引)仰(引)か(引)仰(引)か(引)て(引)金(引)少(引)少(引)御(引)前(引)水  
少(引)洗(引)ひ(引)か(引)て(引)不(引)少(引)少(引)聖(引)徳(引)を(引)手(引)も(引)温泉(引)を(引)  
ヨア(引)の(引)即(引)文章(引)と(引)多(引)少(引)通(引)の(引)人(引)の(引)姓(引)名(引)を(引)載(引)希

代の珍物をうそて怪い所を温泉の町に近見土地を  
極寒の冬小温泉の中に湯あがみ所の人ちで暮る  
り温泉小お家けの里人民數百人鐵湯をゆく  
アレは御所本多利をもとめ止免たまつ餘  
残り又もとふ埋めたりとある事記本多利と  
彼所の人の傳り

一元源兵小坂村名の傍の井戸を水苦味を嘗ひ  
五味狀細りらしく是小活トモ病を除き御冷所友  
善の湯を浴する事

一大坂山寺行基とし人西ノ安永甲午年十月晦日

吉田山の近隣造ト木耳をうそて行喧ノ人の鳴一寺坐  
ゆふ故ゆまう不直もううり人多しをゆりふ又人  
数萬又ゆうう不直もう人今如其事と數度有り  
ゆちと不思議もううを遙小尼寺坐す終も隔  
く御城房主田人と天蓋を上ふぬれうるる虚無僧と  
同道一ノ物語ノ事言之は虛無僧の聲を不思議か  
うう作る者聲のとし不思議小田ひもううい小耳の聲  
大刀不やんのとし不思議ひもううい小耳の聲  
ありあつぬきのとしうううううううううううううう



多尔押<sup>タチバナ</sup>の小を役町人をも何者と  
まつゆる<sup>マツユル</sup>の間<sup>アシカ</sup>に來<sup>アリ</sup>、虚年僧<sup>ムカシノモハシ</sup>のうりと  
伝統<sup>デンドウ</sup>をもひと、久角<sup>クダカ</sup>消息<sup>ミサシ</sup>のぬ所<sup>ハシタ</sup>をもあわ  
まわ<sup>マワ</sup>せしやうとくは何本<sup>ハナ</sup>を詰<sup>ハシメ</sup>合<sup>ハシメ</sup>事<sup>アリ</sup>と、之れ無<sup>ムカシ</sup>付  
乃<sup>ハ</sup>者<sup>ハシタ</sup>すらあ花<sup>ハナ</sup>の生<sup>ハシメ</sup>出<sup>ハシメ</sup>て、旅<sup>アシカ</sup>方<sup>ハシタ</sup>と、町<sup>ハシタ</sup>ハ所<sup>ハシタ</sup>ト  
少<sup>ハシタ</sup>故<sup>ハシタ</sup>某<sup>ハシタ</sup>三<sup>ハシタ</sup>、<sup>ハシタ</sup>の町<sup>ハシタ</sup>小<sup>ハシタ</sup>作<sup>ハシメ</sup>ひく<sup>ハシタ</sup>を業<sup>ハシメ</sup>仕<sup>ハシメ</sup>を今  
宵<sup>ハシタ</sup>お宿<sup>ハシタ</sup>近<sup>ハシメ</sup>む<sup>ハシメ</sup>了<sup>ハシメ</sup>と詰<sup>ハシメ</sup>今<sup>ハシメ</sup>事<sup>アリ</sup>、お宿<sup>ハシタ</sup>をもよ

一紙乃小上品の焼酎飲めども火をともせまじ此火能事無  
宿思すこそ少くも放りたまひとて火候アリ也

一淮南子曰乞火不若取燧寄汲不若鑿井世百事同之  
是何半也人不寄火于半紳成火也人又人之所欲  
之功之立人也如火之半不施于半火者也化之  
半加火以半之半而半之半也半也半也半也  
半也成孰也人半之半也半也半也半也半也  
一淮南子曰古琴五絃至周有上伊則爲七絃ト云今旣絃繁  
絃の第十一絃を止と名付け第十二絃爲絃ト云十三  
絃の中と名づけ第十四絃を名義解しかく諸家の説紛々たり止  
伊ハ淮南子ト不える上伊ナムト止の字淮南子ト一書を  
考ス上字也得也する

一降真香ハ雷打め魚あらじゆ又雷打水くオ乃又くち  
ちふ有て降真香を薰きれニ蘇生<sup>スル</sup>と云ひたる煙  
陰をすそと今世不降真香と云ひハ紫霞島と云物  
もはあ事無<sup>ク</sup>候金前年用色乃降真香を下す是  
物あらと呼<sup>シ</sup>とつま實小豆粉をやうと後粉  
方を取<sup>リ</sup>おもとああらゆるゆくし

一河内國<sup>ミ</sup>安國天皇乃陵御<sup>ハシタニ</sup>御其<sup>ナ</sup>中<sup>ナ</sup>に立せ  
玉碗<sup>ヒタチ</sup>と西琳<sup>ヒタチ</sup>の什物<sup>ヒツモノ</sup>金元年<sup>ヒツモト</sup>號不<sup>ハシタ</sup>三  
合<sup>ヒツモト</sup>也<sup>ハシタ</sup>金元年<sup>ヒツモト</sup>號不<sup>ハシタ</sup>假<sup>ハシタ</sup>水精<sup>ヒツモト</sup>の潔白<sup>ヒツモト</sup>も<sup>ハシタ</sup>造<sup>ハシタ</sup>る  
す<sup>ク</sup>硝子<sup>ヒツモト</sup>も<sup>ハシタ</sup>潔白<sup>ヒツモト</sup>も<sup>ハシタ</sup>真<sup>ヒツモト</sup>の多精<sup>ヒツモト</sup>も<sup>ハシタ</sup>造<sup>ハシタ</sup>る四<sup>ヒツモト</sup>十<sup>ヒツモト</sup>

絆<sup>ヒツモト</sup>也<sup>ハシタ</sup>紅毛<sup>ヒツモト</sup>も<sup>ハシタ</sup>新<sup>ヒツモト</sup>不<sup>ハシタ</sup>造<sup>ハシタ</sup>り物<sup>ヒツモト</sup>を日本<sup>ヒツモト</sup>より  
おもて<sup>ハシタ</sup>て<sup>ハシタ</sup>も<sup>ハシタ</sup>も<sup>ハシタ</sup>近<sup>ヒツモト</sup>年<sup>ヒツモト</sup>不<sup>ハシタ</sup>造<sup>ハシタ</sup>り唐<sup>ヒツモト</sup>也<sup>ハシタ</sup>も<sup>ハシタ</sup>日<sup>ヒツモト</sup>  
也<sup>ハシタ</sup>も<sup>ハシタ</sup>も<sup>ハシタ</sup>白毛<sup>ヒツモト</sup>の硝<sup>ヒツモト</sup>不<sup>ハシタ</sup>造<sup>ハシタ</sup>り<sup>ハシタ</sup>也<sup>ハシタ</sup>安國天皇  
乃<sup>ハシタ</sup>而<sup>ハシタ</sup>既<sup>ハシタ</sup>不<sup>ハシタ</sup>硝<sup>ヒツモト</sup>も<sup>ハシタ</sup>も<sup>ハシタ</sup>造<sup>ハシタ</sup>り<sup>ハシタ</sup>也<sup>ハシタ</sup>不<sup>ハシタ</sup>害<sup>ハシタ</sup>ある本<sup>ヒツモト</sup>を<sup>ハシタ</sup>西域  
不<sup>ハシタ</sup>通<sup>ハシタ</sup>也<sup>ハシタ</sup>舶<sup>ヒツモト</sup>來<sup>ハシタ</sup>の物<sup>ヒツモト</sup>を<sup>ハシタ</sup>も<sup>ハシタ</sup>良工<sup>ヒツモト</sup>也<sup>ハシタ</sup>  
一<sup>ヒツモト</sup>利<sup>ヒツモト</sup>也<sup>ハシタ</sup>送<sup>ハシタ</sup>り<sup>ハシタ</sup>也<sup>ハシタ</sup>是<sup>ヒツモト</sup>を<sup>ハシタ</sup>も<sup>ハシタ</sup>以<sup>ヒツモト</sup>代<sup>ハシタ</sup>小<sup>ヒツモト</sup>今<sup>ヒツモト</sup>年<sup>ヒツモト</sup>本<sup>ヒツモト</sup>を<sup>ハシタ</sup>給<sup>ハシタ</sup>  
乃<sup>ハシタ</sup>通<sup>ハシタ</sup>船<sup>ヒツモト</sup>也<sup>ハシタ</sup>也<sup>ハシタ</sup>

一論衡曰漢建初五年湘水去<sup>ル</sup>泉陵城七里水上聚石曰燕室

立臨水有俠山其下巖塗水深不測二黃龍見長出十六丈  
身大於馬舉頭顧望狀如圖中畫龍燕室丘民皆觀見之去  
龍可數十步又見狀如駒馬小大凡六出水遠戲陵上蓋二  
龍之子也并二龍鳥八出移二時乃入云

一漢土乃画亦禡祿壽の圖小陶朱公周文王南極老人故用  
四又蝙蝠鹿龜の三物を画くも白也又三白の象とつと  
云々雪中河邊等秋画く又月霜海洞画くも白

一安永三年甲午五月廿七日壬午九日ある尼崎海中ナシト  
に蟹夥多く登り浪革の川、兩岸皆蟹と成淀川ゆきさし  
て金毛海岸浪花伏見橋を渡り川辺を走る車一ノ  
川の水少汲小一掬の中蟹數十がぬるゝ蟹の大さ豆の  
ごく色々透明白

一同六月廿三日大風至上方風雨本の糸乃木し大坂近道  
乃海も大浪狂くる溺死の人數万といひも程せ四胃の灰  
半大坂町中山北言狂く津浪生来りて大坂町へ海とある  
と言罵る男女を獨りあはれりて逃走する或を食恨を窮  
へ飯糰抱きて走り騒動ひ終り大坂中残るを如班  
云々説教せる町多し誰いひゆじたうとよとも云ひそ  
不思議の事なりに余ハ母が渡りて家主在り夜明け未成  
て辭す

一糸ハ諸道の坊と、曾我物語小切る説をう

一伊勢山田以海中大風の際小舟多きアキコ多く又  
島大ヲノ因紙張ミ六七尺色墨し近幸産聲の人々人  
峰のあ波吹流れ、一ツの舟小舟モ付テ舟小數年有  
後又土佐ヲ漂流の人ら多く其船をえぼくらひ辛う  
く多す小舟セモ、以テに彼島近海の中村食小大成  
きり、人を免めど人取也ども浦少く、船也少く  
多く食、團飯食無しと多く者を南方少く、石をえ  
ま多供給、峰より後、小便を忍ばぬを胆毛の色く海中、  
生る事年を何日も度々言ひとちう卵の丸を五年食入る  
津利久ノ、彦摩人を卯を携へてゆきとぞいわア子  
ヨタニヤ

一武藏玉上野界乃地小往事の街道、小人皆免を御免く所而  
モ其の人の多く怪しき度り、一ノ年寛政甲寅乃春  
里人亨金ノ、詰室て城ノ小やうて金石所如く壁く絢く所  
小垣高キアシカ、大勢集うる垣石に土中、室虚  
而空く里人一人處入り、人びびにひそく逃のむるを小土  
中うちを多く、人の走りと聞け、流と呼ぶをねがま  
死せざるゝとぞ、身を集う繩代り、リ上り、夫人玉肉も  
ひづき、あと行ふ行ふを、身をとて底小山をく峰金石

乃はまほほ四多方を、廣く高暗かゝる峰に處す。えも不思  
跡もはせざる。とひそをさきを於て坂とすむ所に厚く  
坂下アリ。大ちる佛像が横たふす。土中に埋まつて  
まじゆ像の脇下穴に、墨人佛像の脇中あらへる。ち  
其大なる御店あり。店舗にて寄合いかふ物を販賣する。  
宿所小術をく一村の勞動ある。一は肉小埋糞す。あ  
ら若不如と。行乃定の山小屋に板取面より多く埋  
後毛アリ。と自中觀音方へ。東國ナリ。ヤナリ。と毛根  
ナリ。

一傳説也。新村太郎生村辺山中ナメキと云ひ也。人云し  
毛糞食ても身体不発起く也。

一近江源京河小一毛男子やまと婦人の乳けを飲みをゆ  
初産の婦人の乳房厚く乳け出る。の吸出く。乳  
け乃是故通じ。よすす。新産の婦人皆母乳を人飲まされ  
て乳を吸出。しげ毛今日夜諸方小招致く乳けの飲能  
化の飲食せど。又五難組小穰城の人年二四十歳化の飲  
食御所。一毛乳けの食用。壯健をうと。毛乃も人  
も長寿也。以重ね也。辛辛苦也。

一阿波毛勝陽村ハ傳説ナリ。恐近江小一毛門人橋春庵。佐  
庄内地ナリ。毛障村定方村小綱。と。女十五六才の体度し

く男子と成る則名前高平と改む延平之年 宣政之年甲  
寅三十四五才なり壯美長大の男々妻沙也吳サ春峯  
常々元氣少ナリ

一宣政甲寅春仲玉檜垣居の女子松とソニハ一夜発想一  
晩一ノノ男子とシテ年十七八才ナリ松と改名ナリ  
至都内人中山元倫ナリ伊豆山下に居テ松浪ナリ



